緋弾のアリア　dropuot

影光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
緋弾のアリア　ｄｒｏｐｕｏｔ

【Ｎコード】
Ｎ０４０２Ｙ

【作者名】
影光

【あらすじ】
これは、武偵の中でも少し変わった者達の物語

プロローグ（前書き）

処女作です。しかも、文才無し。挙句の果てに知識は単行本四巻まで。広い心と暇な時間がある方はどうぞ

プロローグ

武装した探偵、通称、武偵
この役職を簡単にいうと『便利屋』
武装を許可され、逮捕権があり、武偵法の許す範囲なら何をしようとかまわない
そして、武偵を育成するために作られたのが東京武偵高校
そんな場所に通うのが俺、神代　蓮
強襲科の二年生
じつは俺には、普通の武偵とは少し違う事がある

「くそ、また今日もダメか」

俺は悪態つきながら持っていたＳＩＧ　Ｐ２２９をおろした
強襲科にある射撃場の的には、一発の弾痕も無い
しかし、俺の足元には１５発分の薬莢が転がっていた

「あ～あ、相変わらず下手くそだな」

隣で射撃をしていた男が笑いながら言う
俺は無言でマガジンをかえると部屋を出て行った
そう、射撃が下手くそなのだ、壊滅的に
ほとんどの武偵は銃を使う、それは相手の武器を破壊したり、抑止のためにだったりだ
そしてその腕前はクエストを遂行する中で大部分をしめると言っても過言ではない
その能力が俺には無いのだ
そのため武偵の力を示すランクはＢ
しかも、かなり頑張った結果だ

「よう、今日もだめか？」
陽気な声が聴こえた方に目だけ向けると大男がいた
「なんだよ、どうせおまえもだろ。海斗」
鳴海　海斗
身長１９２センチ、車輌科の二年生で名前に関係なく山好き、獲物はＤＥ５０
かなりの怪力で普通にＤＥを片手で撃つ
しかし、そんな彼も普通ではない
「ああ、車のアクセルとブレーキを間違えてさ、大破させちまったよ」
海斗は笑いながら後頭部に手をおいて言った
「確か、今月はこれで二台目だったけ？いい加減乗るなよ、車が可哀想だ」
「こ、これでも一生懸命なんだ。免許のために」
そう、車の運転が出来ないのだ、絶対に
自動車（四輪車限定）以外なら大丈夫なくせに、自動車だけは運転できない
武偵の移動手段は公共機関を使うか徒歩かあるいは、自動車だ
つまり、彼の能力はあまり使われることは無い
それ故に、海斗のランクもＢ
以前のった時はエンジンキーを回す向きを間違えてキー折り、レッ

カー車を呼んだ事だってある
あの時は私服だったが、さすがに身分証を見せなくてはならなかっただが、それを見たレッカー車の親父に「あれ？武偵だよね。しかも車輌科の。二人とも大丈夫なのかい？」と言われてしまった
しかも、関係ない俺まで心配され、めちゃくちゃ恥ずかしかった
まあ、その後、有無を言わせずに海斗を殴ったのは言うまでもない
そんな俺達二人は俗にいう『おちこぼれ』で周りからもそう認識されていて一緒にクエスト行こうとする奴はいない

「まあ、そんなのはどうでもいいんだよ。用事が会って来たんだからよ」

「用事？」

「ああ、蘭豹が呼んでたぞ」

「嘘だろ・・・」

蘭豹は強襲科の担任であだ名は人間バンカーバスター。口癖は「死ね！」と「殺す！」など
　かつて香港で無敵の武偵と恐れられた女傑。そのあまりの凶暴さ故に各地の武偵高をクビになり今現在はうちの教員の一人
正直いって会いたくは無い人物

「嘘じゃねぇよその証拠に」

「ここにいるんだよな」

「うわ！」

突然後ろから女の声が聴こえ振り向いた
蘭豹だ
「神代、お前はこのクエストやれ」
そういって押し付けたのは一枚の紙だ
「は？何で俺がやるんですか？しかも、ランクＡのクエストの」
「馬鹿だな、単位が足りないからわざわざ持ってきたんだろう。ありがたく思いなさい」
ありがた迷惑だ
「大変だな～蓮は。ははっ、まあがんばれよ」
「鳴海、あんたもやれ。これは命令だ」
「なんですと！？」
「お前ら二人、留年したくないならやるんだな」
「俺は強襲科じゃないんだけど・・・」
「あぁ！なんだ文句あるのか」
「何もないです」
二人ともそう言う以外なかった

「それと、もう一人このクエストに参加するからな」

それじゃ。とそう言って蘭豹は去っていった

「おい、蓮。マジでやるのか？」

「やるしかないだろう」

やらなかったら後が怖いし

二年生になったら教務科は口をださないし助けないんじゃないのか？

・・・やな予感がする

「うわ、まじかよ。始業式早々に最悪だぜこりゃ」

「悪態ついてないでいくぞ」

「どこにだよ」

「もう一人の参加者の所にだ

Bランクの狙撃科

東京武偵高第三男子寮
蘭豹に押し付けられた紙に書かれていたもう一人のメンバーはここに住んでいる
武偵高に通う生徒の多くは遠路はるばる東京に来るためここを使用する
俺もその一人だ

「なあ、どんな奴なんだよ？」

寮の廊下を二人で歩いていると海斗が言った

「さあな、資料にはBランクの狙撃科と書いてあるぞ」

「げぇ、使える奴ならいいんだけど」

「ああ、車の運転くらいは出来てほしいな」

「あぁ？喧嘩売ってんのか？」

「事実だろ」

話しながら歩いていると、ひとつの部屋の前で立ち止まる

「ここでいいのか？」

表札を確認すると彼の名前があった

「ああ」

チャイムを鳴らすと一人の男が出てきた

「何か用？」

「すみません、仁科　鷹明さんはいらっしゃいますか？」

俺がそういうと男の表情が変わった

驚きと嫌悪が入り混じった顔だ

「あいつに？おお～い仁科！お前に客だぞ！」

部屋の奥からは優男風の男がでてきた

「ありがとう、金田君」

「いいって」

金田と呼ばれた男は部屋の奥に向かう

去り際に「こいつに用事なんて、珍しいこともあるもんだな」とつぶやいていた

「さて、僕に何か用かな？」

仁科はそう言って微笑んだ

「俺の名前は神代　蓮。二年生強襲科。こっちは・・・」

「同じく、二年の海鳴　海斗だ。よろしくな」

「こちらこそ、知っていると思うけど、僕の名前は仁科　鷹明。二年生で狙撃科だよ」

「用件は蘭豹のクエストだ仁科」

「ああ、あのクエストの事かい？主な資料は君達が持っていると聞いたんだけど」

「おいおい、玄関で話すのかよ、場所を変えようぜ」

「確かにそうだね、君達の部屋じゃだめかな？」

さっきの金田の表情や態度、言動からすると仁科はあまりルームメイトと仲が良いわけでは無いのかそう言ってきた

「じゃあ、さっさといこうぜ」

海斗もそれを感じたのかすぐに部屋を出て行った

「これだ」

俺は部屋につくと資料を仁科に渡す

彼は鋭い目つきでそれを見ていた

「大体は理解したよ。埠頭の警備か・・・それだけにしては報酬と単位が大きくないかい？」

「それは俺も思ったが考えても仕方が無い。今、大切なのはどういう風に警備をするかだ」

俺はそう言って地図をだす

地図には何本かの線をあらかじめ付けておいた

「今のところ俺はこのルート、海斗はこっちだ。狙撃については余り詳しくない、仁科なら何処から狙撃する？」

彼の目つきが鋭くなる

「ごめん、もうちょっと近くで見ていいかな？」

「ああ」

彼に地図を渡すとかなりの近い距離で見ていた

「なにやってんだ？」

不審な行動に海斗がたずねる

「ああ、すまない。眼が悪いんだよ」

仁科はそう言って苦笑いをする

「は？」

海斗と声が重なった

「実は僕、近眼なんだ。重度の」

彼の言葉に俺達は絶句するしかなかった

Bランクの狙撃科　2

武偵高から少し離れた埠頭には夜中のにも関わらず、照明により明るい
塩の匂いと波の音しかなく、不気味に感じる
コンテナのひとつに寄りかかる
「異常なしだ、そっちはどうだ蓮？」
「何もない」
耳につけたインカムからは海斗の陽気な声が聴こえる
「なあ、あいつ本当に大丈夫なのか？」
「・・・それを聞くのは三度目だ」
「しっ仕方ないだろ、お前だって気になるだろうが」
俺は本日三度目のため息をつく
「スコープに捕らえれば撃てる、本人がそう言ってんだから大丈夫だろ」
狙撃ポイントの方を見る
今頃、積み重なった荷物の上にいるであろう仁科の姿はここからでは確認できない
「なにより、俺達が仁科にターゲットの位置をある程度教えればい

いだけだ」

「そんなもんなのか？」

「ああ」

『近眼なんだ』

そう言われて驚いた俺達は、実力を確かめるため狙撃科に行くことにした

仁科の銃はＳＶ－９８だ

実際に撃ってもらったが、かなり遠くまで的確に狙撃できていた

ただ、狙うまでに相当時間がかかってはいたが

「休憩終了だ、集中しよう」

「わかったよ」

コンテナから離れる

地図を手に取りライトで照らす

長い夜になりそうだ

「ちょっといいかな」

警備を始めて一時間くらい経っただろうか、定時連絡以外で仁科が言う

「なんだ？」

「端から二番目の倉庫なんだけど、明かりがついてるんだ」

「何号だ」

「Ｃ－３だよ」

「あれ？その倉庫って誰も使ってないんじゃないの？」

倉庫の管理表を見る
そこには空き、使用可能の文字があった

「俺が調べる、仁科、一応警戒しておいてくれ」

「俺も一緒に行こうか？そっちまで走れば数分だぜ」

「まだ何かあったと決まったわけじゃない、海斗は俺が戻るまで俺のルートも警戒してくれ」

「わかったよ」

倉庫の窓からは確かに光が漏れていた
入り口を調べると南京錠が壊されている

倉庫を回り込んで窓からそっと覗く
そこには明らかに一般人じゃない奴らがいた
声を潜める
「こちら蓮、『コードレッド』だ」
「何かあったのかい？」
「ああ、かなりやばい。ＡＫを持った奴が二人、ＵＺＩをもった奴が二人。後二人いるが武器は確認できない」
「まじかよ！？こんなところで何やってんだだよ！？」
「多分、麻薬の取引だ。白い粉と金が見える」
「どうするんだい？」
「捕まえるさ」
「おいおい、相手はマシンガン持ってんだぞ。勝てるか！」
「作戦しだいだな、海斗急いできてくれ。仁科、そこからここを狙撃できるか？」
「不可能だね、移動するよ」
「わかった」
耳を澄ませるとかすかに声が聞き取れた

話し合っている二人の黒いスーツの男がリーダーのようで、その後ろを四人の男達がお互いの動きに眼を光らせている
日本語しか話せない俺には理解できない言葉が飛び交う
しばらくすると海斗がやってきた

「どうすんだよ、まじで」

「とりあえず、戦力を分散して撃破。それが理想だな」

「俺に囮になれとかいうなよ」

「いわない、そもそも倉庫の外には出さない」

「どうして？」

「三人、しかも一人はチェイスが出来ないのにどうやって全員を捕まえる？」

「まあ、確かにな」

「・・・まずいな、取引が終わったみたいだ」

スーツの男が握手をすると、部下を連れて出口に向かっていく
このままでは捕まえられない

「仁科、まだか！」

「あと三分ほしい」

それじゃあ間に合わない

銃をホルスターにしまい、コンバットナイフを取り出す

「海斗、合図を出したら照明を切れ！いいな」

「まかせな！」

海斗がブレーカに手をかけた

敵同士の距離はかなり離れているが問題はないだろう

いける

「今だ！」

倉庫の中は暗闇に支配された

Bランクの狙撃科　3

「どうなってるんだ！？」

暗くなった倉庫には驚いて慌てふためく男達がいた
その隙に窓から侵入する
一人に後ろからそっと近づき首を絞め、気絶させる

「何だ、おまえは！？」

それに他の男が気づくが、遅い
ＡＫの銃口を手の平でそらし、股間に強烈な蹴りを入れる
男は泡を口から出しながら倒れる

「くそっ！」

スーツの男が懐から拳銃をだす
左右にフェイントを入れながら距離を詰める
弾丸が床にあたる
コンクリートをえぐり、火花を撒き散らす
近づくと、相手の手を銃ごと持ち上げる
男は引き金を引くが天井に穴をあけるだけだった
そのまま、あいての腕をひねり、投げる
倒れた男の首に手とうを入れ気絶させる

クラヴ・マガ

イスラエルで考案された格闘術
反射神経を利用し、相手の攻撃に対処、次の攻撃を予防し、制圧す

ることができるなどの不利な状況の想定。また、相手が武器を持っていても効率的に最大のダメージが与えられる武術である
俺はＣＱＣと併用してつかう
銃の使えない俺だが、接近戦だけならＡランクが５人相手でも勝つ自身がある
反対側にいた三人が俺に気づき、銃を向ける

「あそこだ、撃て！」

ＵＺＩの９×１９ｍｍパラベラム弾が俺に襲い掛かる
とっさに頭を下げて横に転がる

「ぐあっ！」

銃声がすると一人の男の銃が手からはじかれる
窓を見ると海斗がＤＥ５０を構えていた

「いまだ！つっこめ！」

しびれる手を押さえる男の顔に右ストレートをおみまい
男の体は後ろに浮くとそのまま倒れた

「ごめん、今ついた。場所が分からないから指示してもらっていいかな？」

狙撃ポイントについたのか仁科の声がインカムから聴こえるが、それどころではない
倉庫は空き部屋で麻薬のダンボール以外何も無い
遮蔽物がないのだ
必然的に走ることになる

相手の体の向き、動き、目線、腕の高さ、銃口の位置
これらを見ながら予測し、かわすしかないのだ
「お前の方からだと北北西だよ！」
俺に意識が向かないようにＤＥ５０を断続的に撃ちながら海斗が言った
「まだ見えない、ライトを空に向けてもらえるかな？」
スーツの男が撃ちつくしたＵＺＩを捨て、懐に手をのばす
その隙を逃さず駆ける
その時だった
俺の視界が突然ぶれる
地面に転がっていた薬きょうを踏んだのだ
体制を立て直すが、間に合わない
戦場ではコンマの時間が生死をわける
接近戦ならなおさらだ
スーツの男がリボルバーの銃口を俺にむける
海斗が何か叫ぶ
リボルバーのシリンダーが回りだす
二つの銃声が響いた
倒れたのはスーツの男だった
隣にいた男にも銃弾があたりＵＺＩを放し、撃たれた足を押さえている
急いで近づき、銃を蹴り飛ばす
「武偵だ、不法侵入の罪で逮捕する」
スーツの男が俺を睨んだ

「大丈夫かよ！？」

海斗が男達に手錠をかけながら言った

「ああ、それより仁科。助かった」

「いいよ、気にしないで」

「・・・？。何処から撃ったんだ？」

「ここだよ」

窓の外で光が点滅した

コンテナを船から降ろす、クレーンの上だ

３００メートル近くはあるだろう

「嘘だろ・・・」

仁科はこの距離で二発の弾丸をすばやく撃ち、あててていた

「言ったでしょ、『スコープに捕らえれば撃てる』って」

インカムから聴こえる仁科の優な声が自慢げだった

Bランクの狙撃科　4

あの後、武偵高に連絡をとり、護送車を呼び事件は収束をむかえた
しかし、どうしてこのクエストを俺達にやらせたかったのか気になり、調べた
結果、最悪な事実が発覚
このクエストは元々は一年がやるはずだったらしい
だが、情報科で危険な確立が高いと判断されたためため、俺達に回ってきた
俺達ならいいのか？
そう言いたかったが蘭豹に文句を言えるほど命知らずじゃないけど、本当の最悪は『これ』じゃない

「泣き寝入りじゃねえかよ、くそっ」

海斗が寮部屋のソファに寝転ぶ

「まあ、良かったんじゃないかい？みんな無事だし」

向かい側のソファでは鋭い眼で雑誌を読む仁科が言う

「まあそうだな、あれだけの事やったんだぜ、単位も報酬もすげぇだろうしな」

「そのことなんだが・・・」

二人の眼が俺に向く

「なんだ、もう報酬を貰ってきたのか！？」

「そうじゃない、おちつけ」

「今回のクエスト、この紙の一番下を見てみろ」

「これは・・・最初にもらった資料じゃないかい？」

「一番左下」

「あ？何か書いてあんぞ」

直、今回のクエストにおいて、追加の報酬や単位はでない、以上

蘭豹

「・・・嘘だろぉぉぉぉお！」

海斗が叫び声を上げてフローリングの床に崩れ落ちた

「すでに、蘭豹には問い合わせた。変更は無いそうだ」

「ははっ、仕方がないね」

仁科が立ち上がり、出口に向かう

「そろそろ部屋に戻るよ」

そう言って笑うが、その顔はどこか無理をしている感じだ

やはり、仲が良くは無いのだろう

「・・・なあ、仁科。俺達の部屋に引っ越さないか？」

「え、でも迷惑じゃないかい？」

「俺も構わないぜ、二部屋も空いてるしな」

「それに俺達はもうチームだろ？マジな話し、蓮は射撃が下手くそを通り越してるしな、ちょうど良いんじゃねえ？教えてもらえよ」

ほっとけ

しかし、こういう時の海斗の強引さは役に立つ

実際、口から出してしまったが、なんて言うべきか迷っていた

「・・・本当にいいのかい？」

「ああ、大船にのったつもりでいてくれ」

胸をドンとたたき誇らしげにする海斗

大船って、何のたとえだよ

「じゃあ、これからもよろしく、神代君、海鳴君」

「まった、チームなんだ、名前で呼び合おう」

一瞬眼を開き、驚く仁科だがすぐに笑う

「そうだね、よろしく。蓮君、海斗君」

「ああ、こちらこそ」

「なんとかやっていこうぜ」

男の友情の握手

くさいとか言われたって今だけは構わないとおもった

Ignorance is bliss

鷹明が引っ越してきて何日か経った
その間、学校では色々なことがあった
ピンク頭の小学生体系の転校生が教室で突然銃を撃ったり
友人の遠山がチャリジャックにあったり
撃った弾が隣の的に当り『すげぇ、まねできないよ』と強襲科の奴に言われたり
本当に色々とあった
しかし、それはまだ終わらないようだ

「やべぇーよ、どうしよ」

ソファには頭を抱え項垂れる海斗がいた

「どうかしたのかい？」

「これだよ、これ」

海斗は一枚の紙を差し出す

「・・・。請求書？」

鷹明は目を細め、大きく書かれた文字を読んだ

「そうなんだよ、こないだ車一台廃車にしちまっただろ。その請求書だよ」

「・・・。でも、金額がおかしくないかい。廃車で５０万なんて」

「・・・車ぶつけたときに電柱を倒した」

さすがの鷹明も顔が引きつっていた

「あーあ、まじでどうしよ。高校生にして借金まみれとか、お先まっくらだぜ」

いままでこいつが人を引かなかったが奇跡だ

「クエストをやって、こつこつと返済するしかないんじゃないかな？」

「俺は借金を返すために武偵になったんじゃねえよ。三年かかるわ」

おおげさだな

しかし、俺達の実力から言ってすぐに大金が手に入るようなクエストは無い

「明日、掲示板見てこいよ。何か良いのがあるかもしないだろ？」

「んー、それしかないか」

口をへの字に曲げてはいるがやる気はあるようだ

ピンポーン

部屋にチャイム音が響く

こんな夜中に誰だよ

「俺がでるよ」

扉を開けるとそこにはいつもの暗い顔がさらに暗くなった遠山　キンジがいた

「蓮、悪いんだが少しかくまってくれないか？」

状況が全く読めない

が、憔悴しきったようなキンジをこのまま廊下に立たせるのは可哀相だ

「ああ、入れよ」

とりあえず、ソファに座らせる

「君は・・・確か遠山君だよね？仁科　鷹明です、よろしく」

「遠山　キンジだ。よろしくな」

「何しに来たんだよ？」

「いや、その、なんというか・・・とりあえず、いさせてくれ」

「なんだそりゃ？」

ともかく、ここにしか居場所が無いみたいだ

「まあ、いいんじゃないか？それよりキンジ、こないだのチャリジャックって・・・」

この後、とりとめの無ない会話が続いた
一時間くらいしたらキンジが『そろそろ帰るよ』といい、帰って行った
少ししたら隣の部屋からキンジの叫び声と女の声が聴こえた気がしたが、気のせいだろうか

Ｉｇｎｏｒａｎｃｅ ｉｓ ｂｌｉｓｓ ２

「このクエストを一緒にやろうぜ」

昼休み、屋上で鷹明と昼食を食べていると海斗がクエストの書かれた紙を突きつけてきた

人探し
ランク等の制限無し
報酬５０万
単位０．５
備考　依頼人は早急に解決できる人を探しています

「・・・これ、探偵科のだろ？俺は強襲科なんだが」

「僕も狙撃科だよ」

「いいじゃんか、知恵と勇気でどうにかなるだろ？」

どこの漫画だよ
どうしよ、キンジでも誘うか？

「あ、ついでに言っとくけど、これ以上メンバーは増やさないからな」

「なんでだよ？」

「報酬が減るだろ」
その前に依頼を解決できないだろ
「でも、さすがに探偵科はいるとおもうよ。僕らは専門外のところがあるしさ」
「た、確かに・・・」
「それに、俺はやるといっていない」
「なんでだよ、友達だろ!?」
興奮気味に俺に詰め寄ってくる海斗
「それにほら、武偵憲章にもあるじゃんか。仲間を信じ、仲間を助けよ、て!」
胸倉を掴み、ゆすりだす
気持ちが悪くなりそうだ
「借金地獄から俺を救ってくれ!そして、俺を信じてクエストを受けてくれ!」
都合の良い解釈だ
胸倉を掴む腕を外し、投げる
海斗は顔面からコンクリートにたたきつけられていた
「クエストの選択が悪すぎる。それに報酬が５０万って明らかに怪しすぎる。俺はおりるぞ」

「鷹明。お前は違うよな？信じてるぞ？」

「悪いけど、僕も無理かな。蓮の言うとおり探偵科のクエストだよこれは」

「俺は諦めねえ、『諦めるな、武偵は決して諦めるな』だ」

もうそれはいらない

床に手をついて立ち上がる海斗

「なにより、もう受けちまったんだ。後戻りは出来なぇんだよ！」

「今、なんて言った？」

「受けてきた、俺達三人、契約済みだ」

俺と鷹明はアイコンタクト

気持ちは同じのようだ

「殺るか」

「そうだね」

「ちょっ、まてまて話を、ぎゃぁぁぁぁぁぁあ！」

屋上には悲鳴が響き渡る

その後、隣のクラスの奴に聞いたところ午後の授業には出てなかっ

たそうだ
・・・手加減したんだがな
今日もキンジはＨＲが終わったと同時に窓から逃げていた
最近は下校拒否らしい
昨日の悲鳴に関係があるんだろうか？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0402y/

緋弾のアリア　dropuot

2011年11月16日03時19分発行